

虹と日本文藝

——現代撰集・『昭和萬葉集』をめぐる——

萩野恭茂

小 序

本稿は、和歌撰集史上の近・現代に花開き、その近・現代(昭和元年～昭和50年)の短歌四四二四八首を内蔵する『昭和萬葉集』(注1)(昭54・2～昭55・12 講談社)より(注2)の語を有する歌について逐次摘出作業を行い、その結果を踏まえて、いささかの考察を加えてみたものである。

(注1) 顧問Ⅱ土屋文明・土岐善磨・松村英一

選者Ⅱ太田青丘・鹿兒島寿藏・木俣修・窪田章一郎・五島

茂・近藤芳美・佐藤佐太郎・前川佐美雄・宮村二

企画協力Ⅱ上田三四二・岡井隆・島田修二

選歌協力Ⅱ安達龍雄・他35名、ほか。

(注2) 同概念を持つものの異表記、例えば(にじ)・(ニジ)・(レイ

ンポー)・(天の浮き橋)等も含めて調査。

『昭和萬葉集』(昭54・2～55・12、講談社)

〈凡 例〉

一、短歌本文中〈虹〉語の部分をゴシック体とした。

一、(1)(2)は、『昭和萬葉集』中〈虹〉語を有する歌の通し番号。

一、脚注解説 ①作者②『昭和萬葉集』中の「巻」名。但し、巻一

昭和元年～五年 巻二昭和六年～八年 巻三昭和九年～十一年 巻四昭和十二年～十四年 巻五昭和十五年～十六年 巻六昭和十六年～二十年 巻七昭和二十年～二十二年 巻八昭和二十三年～二十四年 巻九昭和二十五年～二十六年 巻十昭和二十七年～二十九年 巻十一昭和三十年～三十一年 巻十二昭和三十二年～三十四年 巻十三昭和三十五年～三十八年 巻十四昭和三十九年～四十二年 巻十五昭和四十三年～四十四年 巻十六昭和四十五年～四十六年 巻十七昭和四十七年 巻十八昭和四十八年 巻十九昭和四十九年 巻二十昭和五

十年 別巻Ⅱ昭和歌人小評伝・戦争詩歌文献解題・作者総索引他 ③『昭和萬葉集』各巻中における当該歌の存在頁。同じく章(I・II…)部立分類の「題」・朱色印刷による頭注的(小題) ④典拠文献(発行年)。但し発行年は(昭和)、「Ⅰ」著書、「Ⅱ」新聞・雑誌。昭和十二年以前の作品で、『新萬葉集』に先出のものはその旨を付した。



吹き降りの 大空にして 薄日さし 我
が眼の下に 虹たちにつけり (1) ①下村海南②巻一③P四
三―二 I・「昭和時代の開幕」・「飛行体験」④

『天地』(4)

歟つきてみな仰ぎをり虹たてり夕虹たてり代田の上に (2) ①堀内皆作②巻一③P一
五―三 IV・「農村の日々」・「稲作にはげむ」
④「アララギ」(3・10)

昨日よりねむりふけりし心さぶし岬山の上に朝の虹たつ (3) ①五味保義②巻一③P二
七―一 VI・「自然の姿」・「日・月・風・雨」
④『清峽』(16)

嵐めく空の下びにあらはれて静かなるか もゆふべの虹は (4) ①細野春翠②巻一③P二
七―二 VI・「自然の

ホースに当てた拇指をはね除けて青空に 爆発する水の歓喜だ。虹だ！ (5) ①萍水馬②巻一③P三〇
六―五 VI・「くさぐさの歌」・「自由律短歌」④
『季節風』(6)

月光に虹のたちたるあはれさを蕃界にして我は見につけり (6) ①尾藤豪宗②巻二③P一
六―五 IV・「冬の時代」・「台湾にて」④「アララギ」(8・9)

タイプライター吾が打ちつづく傍を虹の立てりと人言ひて過ぐ (7) ①庄野光子②巻二③P一
九―八 IV・「仕事の歌」・「アララギ」(8・2)

泥まみれの天使のやうなお前、そつと抱けば空に立つ虹 (8) ①前田透②巻二③P二
〇―三 V・「愛と死」・「愛の歌」④「こみち」(8・5)

寒さむと草枯れ伏しし道ゆけば音江の山に虹立ちにつけり (9) ①樋口賢治②巻二③P二
六―一 III・「天地自

然」・〈天地自然〉④「アララギ」(6・1)

列の来るけはひなり

(14) 二九七―7 VI・「天地自然」・〈くさぐさの歌〉

松原のむかうに低き午後の虹駅一つ過ぎてすぐに消えたり

(10) ①堤青燕②卷二③P二六一―4 VI・「天地自然」・〈天地自然〉④『堤青燕歌集』(25)

いのち断たるおのれは言はずことづては虹よりも彩にやさしかりにき

(15) ①斎藤史②卷三③P六四一―11 II・「二・二六事件」・〈処刑〉④『魚歌』(15)―濁流

麓が村に虹たちにけりこの虹を見越して幾つの山が起き伏す

(11) ①杉浦翠子②卷二③P二六九―5 VI・「天地自然」・〈山〉④『浅間の表情』(12)

うら山は照りてしぐるれ下田より手にとるとき近き虹立つ

(16) ①中村憲吉②卷三③P二〇七―7 VI・「遺詠と挽歌」・〈中村憲吉の死〉④「アララギ」(9・1、2)―各一首。

大き虹の裾明りに冴えて山の湖の波がしら白しこの道は嵐

(12) ①五島茂②卷二③P二七八―9 VI・「天地自然」・〈外国旅行〉④『ヨーロッパ歌集』(15)『新萬葉集』に先出。

ひとよさを君が亡骸をまもりたるあかつきにして低き虹立つ

(17) ①友広保一②卷三③P二〇九―5 VI・「遺詠と挽歌」④「アララギ」(9・8)

川魚のむねをひらいてゐるときに夕虹あがる夕虹のうた

(13) ①前川佐美雄②卷二③P二九七―6 VI・「天地自然」・〈くさぐさの歌〉④『白鳳』(16)

ひむがしに海ひらけたる国ゆきて青山にたつ虹あはれなり

(18) ①結城哀草果②卷三③P二六一―1 VII・「四季の移ろい」・〈天地自然〉④「すだま」(10)『新萬葉集』に先出。

木に登り野ずゑの虹を見てあれば花嫁の

①前川佐美雄②卷二③P

若葉山濡れながらにし吐く息の一息なが
し七色の虹

(19) ①四賀光子②卷四③P二
六二一3 V・「四季の
うつろひ」・〈夏〉④『麻
ぎぬ』(23)

音もなく空にあらはれて七色の大きな虹の
輪しばらく消えず

(20) ①四賀光子②卷四③P二
六二一4 V・「四季の
うつろひ」・〈夏〉④『麻
ぎぬ』(23)

支那海の雲を背にして柱なす直立ちし虹
は片くづれせり

(21) ①石樽千亦②卷四③P二
七五12 V・「四季の
うつろひ」・〈海〉④「短
歌研究」(12・10)

煙突のひしめき立てる工場地帯吐きつぐ
煙も虹をかくさず

(22) ①長沢美津②卷四③P三
〇〇14 ④やまだ・
むねみつ筆〈昭和短歌史
概論〉中の引用。

汽車走る日照雨ふる野づかさに立ちたる
虹を兄よ見て征け

(23) ①西村直次②卷五③P八
二一7 II・「戦場へ」・
〈兄弟を送る〉④「アラ
ラギ」(15・1)

かがやきて虹たつもとをあゆみ来る馬の
すべては鬣こほりはつ

(24) ①小川博三②卷五③P一
五三一2 III・「はてな
き戦線」・〈軍馬〉④「月
下の山」(32)

大雲塊の崩るる側を通るとき手を触る如
く虹現れぬ

(25) ①佐藤完一②卷五③P一
五七一1 III・「はてな
き戦線」・〈艦上にて〉④
『アララギ』(16・3)

日照雨しぐるる曠野のまづしさはさもあ
らばあれ大きな虹

(26) ①樫八重武光②卷五③P
一七六14 III・「はる
かなる祖国」・〈大陸の風
光〉④「多磨」(16・12)

礪波野はいま時の間の雨はれて立山こゆ
る二段の虹

(27) ①桜井巖区②卷五③P二
八六一6 V・「四季の
よろこび」・〈山〉④「ア
ララギ」(15・12)

四月の雪ある山の斜面、烈風のなかに虹
あかくわきたつ

(28) ①前田夕暮②卷五③P二
八七一7 V・「四季の
よろこび」・〈山〉④「烈
風」(18)

島山は雨にかくれて虹の内にわが母艦の
みあかるく浮ぶ

(29) ① 深沢恒雄② 卷六③ P一
四四—4 IV・「海に漂
う」・〈測量船にて〉④「は
るかなる山河に」(23)

風上に転舵するとき紺青の潮さやきて
虹を描きぬ

(30) ① 田村賢雄② 卷六③ P一
四七—4 IV・「海に漂
う」・〈海戦〉④「赤道」
(43)

朝空の虹がうつくし弧の中を二羽の白鷺
羽うちて飛ぶ

(31) ① 大塚泰治② 卷六③ P一
五八—5 IV・「生死を
超えて」・〈戦野の四季〉
④「恵我野」(46)

敵弾のうがてる穴に虹たてて水道栓は霧
ふきあぐる

(32) ① 菊地猶喜② 卷六③ P一
八四—2 V・「燈火管
制の下に」・〈瓦礫の中
で〉④「水甕」(20・3
10合併号)

うつくしく朝虹たてば雨や来と蓑と笠も
ち稲刈りに出づ

(33) ① 結城京草果② 卷六③ P
二二—4 VI・「農村
の日」・〈農村の四季〉
④「まほら」(23)

あきらけき月夜ひととき時雨れつつ夜の
虹たてる空の静まり

(34) ① 岩本尚久② 卷六③ P二
八二—1 VIII・「四季の
喜び」・〈秋〉④「アララ
ギ」(19・2)

虹の如く薄荷の如く香りけり天塩川辺の
大紫蘇の実

(35) ① 徳川夢声② 卷六③ P二
九三—8 VIII・「くさぐ
さの歌」・〈旅の歌〉④「夢
声戦争日記4」(35)

東京の焼野を跨ぐ大虹の立ちたる脚のま
さやかに見ゆ

(36) ① 窪田章一郎② 卷七③ P
一〇〇—5 III・「廃墟
の中から」・〈焦土〉④「ち
またの響」(25)

空襲に焦土となりし町の空冬虹生れて夕
べ華やぐ

(37) ① 牧晓村② 卷七③ P一〇
四—1 III・「廃墟の中
から」・〈焦土〉④「水甕」
(21・7)

住みつきし火山灰地の秋風になしき虹
を子とながめをり

(38) ① 浅野晃② 卷七③ P二九
〇—2 VII・「折々の
歌」・〈日日随感〉④「曠
原」(29)

かなたなる氷雲の空の奥ぐらき悲願に似
たる寒虹の照り

(39)

①前川佐美雄②卷八③P
二五五―6 VI・「四季
のうつろひ」・〈冬〉④「短
歌研究」(25・1)

冬の虹思ひのほか濃き雪野のうへ眼を上
げてより我はとまどふ

(40)

①斎藤史②卷八③P二五
六一―7 VI・「四季のう
つろひ」・〈冬〉④「うた
のゆくへ」(28)

中空の陽をばかこみてアリゾナの砂漠に
立てる虹四つ見ゆ

(41)

①貴家しま子②卷九③P
一二五―4 II・「外地
の日」・〈アメリカで〉
④「国民文学」(26・4)

海の虹消え去りしかば短日の町の暮色へ
時移るのみ

(42)

①峯村文人②卷九③P一
五四―1 III・「生活の
周辺」・〈夕まぐれ〉④「短
歌声調」(26・4)

夕立の晴れてたちまち日のさせば木曾山
の上に虹たちにけり

(43)

①今井白水②卷九③P二
六三―6 V・「くさぐ
さの歌」・〈旅〉④「今井
白水歌集」(46)

吾がために君が買ふ朝の海老五疋虹のご
とくに手の上にあり

(44)

①土屋文明②卷九③P二
六四―9 V・「くさぐ
さの歌」・〈旅〉④「自流
泉」(28)

鉄梯子下りはじめたるわれに見ゆクレー
ンの右に立つ白き虹

(45)

①小佐治安②卷九③P二
七九―4 V・「くさぐ
さの歌」・〈モダニズム短
歌〉④「短歌研究」(26・
8)

夕淡く懸れる虹の輪のなかに水そことな
る村はひそけし

(46)

①笹野儀一②卷十③P一
四四―5 III・「戦後の
日本」・〈ダムに沈む村〉
④「日本短歌」(27・7)

「鶏苑」(27・28・9合
併号)

午睡の面を長き白髯は覆ひたり不思議な
る虹はそこよりあがる

(47)

①太田満喜子②卷十③P
二二四―1 V・「愛と
死」・〈父を〉④「遠き海」
(31)

強羅のやま君とのぼりて秋の夜の虹のさ

①山口茂吉②卷十③P二

やけき見しを忘れず

(48)

三二一 4 V・「愛と死」・〈茂吉の死〉④「アラギ」(28・10)

て田搔き続ける

(53)

一四三一 6 III・「農村の日日」・〈米作り〉④「朝日新聞」(31・7・8)

片空は時雨の通りあるならしあはあはと朝の虹かかる見ゆ

(49)

①三浦百郎②卷十③P二七七―5 VI・「四季の移ろい」・〈自然〉④「青雲」(28)

田車を押す吾が田より伸びゆきて村一ぱいに虹が立ちたり

(54)

①高木繁②卷十一③P一四四―3 III・「農村の日日」・〈米作り〉④「国民文学」(30・9)

通り雨過ぐるしばしを立つ虹かもみちの山に弧線明るく

(50)

①峯村国一②卷十③P二七七―6 VI・「四季の移ろい」・〈自然〉④「耕全集」(32)

時雨きて虹かかりたりその脚の光の中に牛等草はむ

(55)

①吉田省三②卷十一③P二四〇―6 V・「四季の移ろい」・〈秋〉④合同歌集「青森県歌集第17集」(49)

あざやかに虹たちにけり驟雨^{しゅう}すぎてなほ霧のごとく雨ふる中に

(51)

①植村武②卷十③P二七七―7 VI・「四季の移ろい」・〈自然〉④「凌霄」(33)

山を背に大きく立ちたる朝虹がしずかに移りゆくを見ており

(56)

①宮城謙一②卷十一③P二五二―1 V・「くさぐさの歌」・〈山〉④「短歌」(31・11)

海を流るる河の岸とも小さき島日本をおおう虹を見にけり

(52)

①小崎碇之介②卷十一③P一三〇―1 III・「仕事之歌」・〈海上で〉④「海流」(41)

シャワーを浴む男のからだ窓よりの陽に断れぎれの虹まどふ見つ

(57)

①田谷鋭②卷十一③P二八一―1 V・「折々の歌」・〈日々の詩情〉④「乳鏡」(32)

虹の脚わずかに浮び日暮るれば牛励まし

①野沢一二②卷十一③P

虹いろの孔雀の羽根が鉄板の壁にふれつ
つひらき始めぬ

(58)

①田谷鋭②卷十一③P二
八一—8 V・「折々の
歌」・「日々の詩情」④「乳
鏡」(32)

議事堂を目指せる示威の過ぐる今日しぐ
れの暗き夕虹の下

(59)

①近藤芳美②卷十二③P
八六一— II・「癒えぬ
傷跡」・「安保闘争前夜」
④「喚声」(35)

噴水の水に時のまの虹立てば如何ならむ
明日わがために待つ

(60)

①尾崎左永子②卷十二③
P一五〇—3 IV・「愛
と死」・「女心」④「短歌」
(32・10)

城山と桜島かけあなさやけ正月虹の立ち
わたりたり

(61)

①牧曉村②卷十二③P二
一三一—3 V・「四季の
うつろい」・「歳晚・新
年」④「黒潮」(34・3)

うす紅葉もみぢにはふ前山ほのぼのと虹立ち渡
る幾峰かけて

(62)

①窪田空穂②卷十二③P
二二〇—3 V・「天地
自然」・「天地自然」④「老
楓の下」(35)

比叡より立ちたる虹の太らかに湖を跨またぎ
て鈴鹿嶺に落つ

(63)

①飯田棹水②卷十二③P
二二〇—4 V・「天地
自然」・「天地自然」④
「華」(42)

かすかなる虹消えゆきし空の下木原おも
むろに光りはじめぬ

(64)

①三枝茂②卷十二③P二
二〇一—5 V・「天地自
然」・「天地自然」④「冬
砂」(45)

潮くらくいたぶる沖にひくく頭ち虹のた
まゆら色かがやきぬ

(65)

①西川敏②卷十三③P二
三五—3 V・「四季の
移ろい」・「雪」④「玄冬」
(41)

虹の松原よぎりて出でし磯の上に限りな
しけふの北空の晴

(66)

①井出敏郎②卷十三③P
二三七—2 V・「自然
の姿」・「自然の姿」④「ア
ラギ」(35・1)

赤い旗たてたる舟とうしほよりたつ虹と
かなし 脈絡なきに

(67)

①生方たつゑ②卷十三③
P二四四—6 V・「自
然の姿」・「海」④「海に
たつ虹」(37)

夕立の雨はれしかば天草の海のおもてより直ぐに虹たつ

(68)

①佐藤佐太郎②卷十三③

P二六三—1 VI・「く

さぐさの歌」・〈旅〉④『冬

木』(41)

うら深く虹^た頭たしめて茫々とひとりゐるなり夜のほどもろを

(73)

①佐佐木由幾②卷十四③

P九七—2 II・「生活

の歌」・〈夜〉

かつて暴たりし者をも迎え虹のごと燈を飾る林の中の賓館

(69)

①前田透②卷十三③P二

六九—2 VI・「くさぐ

さの歌」・〈海外の旅〉④

『煙樹』(43)

吹き荒れし一夜は明けておどろなる秋野に來れば草に虹たつ

(74)

①三浦桂祐②卷十四③P

二〇八—3 V・「四季

の歌」・〈秋〉④『莫愁』

(48)

決然と憎みをこばむ心より湧きてやまざる音楽の虹

(70)

①片山敏彦②卷十三③P

二八七—2 VI・「折々

の歌」・〈折々の歌〉④歌

日記『ときじく』より

もみぢせる山より山に朝立ちて消えゆく虹をひとり目守りぬ

(75)

①武田永子②卷十四③P

二一〇—2 V・「四季

の歌」・〈秋〉④『アララ

ギ』(42・1)

夜勤より帰りてねむる我が上にオリンピックファンファーレ虹のごと鳴る

(71)

①土屋元②卷十四③P二

一—7 I・「東京オリ

ンピック」・〈東京オリ

ンピック〉④『朝日新聞』

(39・11・1)

まなうらに青き炎の虹たちぬ明月院の紫陽花^{あじさ}のむれ

(76)

①和田智恵②卷十四③P

二四—4 V・「天地

自然」・〈草木〉④『短歌

研究』(41・8)、『香水』

(41)

ひむがしの空の暗きに浮びたる夕^{ゆふ}の虹を指差しにけり

(72)

①高橋六二②卷十四③P

九四—1 II・「生活の

歌」・〈夕暮〉④『童牛』

(42・6)

雨外套着てさむざむと行く渚さやけし九月の海の上の虹

(77)

①樋口賢治②卷十四③P

二五—9 V・「天地

自然」・〈旅情〉④『アラ

ラギ』(41・2・9)

組織みな消えゆけ額にきらめきてひとつ
真近に立てる虹の根

(78) ①村上一郎②卷十四③P
三〇〇一七 VI・「くさ
ぐさの歌」・「わが思い」

④『撃攘』(46)

追ひつめられし鯨が空に噴きあぐる潮
がしばし虹に霧らへり

(79) ①杉浦秋男②卷十五③P
一四一五 II・「生活
の歌」・「海で」④「短歌
研究」(44・9)

めぐり来し午後の日ざしに旋盤のにじむ
油の虹色に照る

(80) ①小山正一②卷十五③P
一六九一八 「はたらく
人々」・「工場で」④「短
歌」(43・3)

岩の裂目を落ちくる滝のひとところ日の虹
色にとどまるを見ぬ

(81) ①風間夢津絵②卷十五③
P二五〇一四 VI・「自
然の姿」・「日月風雨」④
「ボトナム」(43・9)

廃液にしばしばいろを変ふる川けふいち
めに流す虹の色

(82) ①吉田一彦②卷十六③P
二〇一五 I・「万博の
日本」・「公害」④「短歌
手帖」(46・1号)

コスモスの揺れる彼方に虹は消えまた平
凡なたそがれの町

(83) ①上川原紀人②卷十六③
P八九一五 II・「生活
の周辺」・「夕暮」④『原
色の過程』(52)

むらさきに指染め茄子とる朝の間の峽に
かかる虹あはあはし

(84) ①佐々木茂②卷十六③P
一三四一三 III・「農家
の苦悩」・「農作業」④『分
葉期』(49)

ミスト機にて撒きゆく霧に陽は透けて桃
の樹間に虹かかりたり

(85) ①岡本甲子②卷十六③P
一三六一五 III・「農家
の苦悩」・「果樹園」④
「龍」(45・11)

ベッドよりわれをよぶ君虹を溶くごとく
油彩にあそべる夜を

(86) ①星河安友子②卷十六③
P一七一八 IV・「愛
と死」・「愛の歌」④「未
来」(45・3)

虹斬ってみたくないか老父よ種子時き
ながら一生終るや

(87) ①伊藤一彦②卷十六③P
一七九一八 IV・「愛と
死」・「父母」④「Rev
o 律」(45・1号)「瞑鳥

o 律」(45・1号)「瞑鳥

記(49)

春一番今朝も荒れゐる追戸の潮けぶりと
なりて虹を伴ふ

(88) ①藤原元②卷十六③P二
一〇一 V・「四季の
歌」・〈春〉

いま虹のかかれば見よとかかる電話
雨の過ぎてゆらく落日

(89) ①近藤とし子②卷十六③
P二三五―1 V・「自
然の姿」・〈日月風雨〉④
「小鳥たちの来る日」
(49)

宇宙の一片なるべしモンブラン南の峰に
虹の輪生るる

(90) ①久保田フミエ②卷十六
③P二五九―10 V・
「自然の姿」・〈外国の旅〉
④「まひる野」(47・2)
『宇宙花』(46)

カフカとは対話せざりき若ければそれだ
けで虹それだけで毒

(91) ①岡井隆②卷十六③P二
九六―10 VI・「くさぐ
さの歌」・〈わが心象〉④
『鶯卵亭』(50)

亡びたるふるさとへ還らざる友の名も思
い立ち返れ夕虹のごと

(92) ①近藤芳美②卷十六③P
二九八―4 VI・「くさ

スモッグの空鮮やかに裁ち切りて虹は群
れたつビルを抱けり

(93) ①佐藤北水②卷十七③P
三〇―3 I・「揺れ動
く日本」・〈公害・大気汚
染〉④「窓日」(47・11)

ふたたびは虹にあかるき日のさして稼ぎ
とほしき農に老いゆく

(94) ①宮岡昇②卷十七③P九
六―5 III・「さびしい
農業」・〈農に生きる〉④
『冬の雁』(49)

夕虹のうすら呆けつつ過す日を海棠百花
咲き乱るなり

(95) ①佐佐木幸綱②卷十七③
P二〇〇―7 V・「四
季の歌」・〈春の花々〉④
『直立せよ一行の詩』
(47)

噴水のしぶき交はるたまゆらを幸のこ
と秋の虹たつ

(96) ①西畑博之②卷十七③P
二〇八―7 V・「四季
の歌」・〈秋〉④『双魚宮』
(52)

ぐさの歌」・〈くさぐさの
歌〉④「遠く夏めぐりて」
(48)

小雨ふる明るき空に虹かかり北山はその
虹の輪のなか

(97) ①小西清子②卷十七③P
二二五—2 V・「自然
の姿」・〈霧・雨・雲・
月〉④「短歌研究」(47・
7)

虹ヶ浜に夜ごと爆死体を焼きし炎眼底に
ありて二十八年経つ

(102) ①森園子②卷十八③P五
三—3 I・「戦争の傷
跡」・〈わが戦後〉④「四
国新聞」(49・3・15)

雄おこころやわれに流れて虹たつをむかし
群盗のほろびたる石

(98) ①馬場あき子②卷十七③P
二八〇—10 VI・「現
代の歌」・〈女歌〉④『飛
花抄』(47)『桜花伝承』
(52)

起きいでてわれの五坪の菜園に水を注げ
ば虹たつものを

(103) ①太田青丘②卷十八③P
九〇—4 II・「生きゆ
く日々」・〈朝の歌〉④『太
田青丘全歌集』(54)

魚の血のはじくあぶらの虹いろに吾が刃
あまねくぬれたるを持つ

(99) ①河野愛子②卷十七③P
二八八—6 VI・「現代
の歌」・〈わが心象〉④『魚
文光』(47)

北風とともに入り来て声も寒く虹いろの
紙を購かいたしという

(104) ①杉村けい子②卷十八③P
二五〇—6 V・「四
季の歌」・〈冬〉④「雲と
ねこ」(51)

かなしみのさわまるときしさまざまの物
象た顕かんちて寒の虹ある

(100) ①坪野哲久②卷十七③P
二九五—13 「昭和短歌
史概論」・〈人間への問い
かけ〉(S) 中に引用

驟雨すぎいくばく昏き空の藍草野を占め
て大さ虹立つ

(105) ①田谷鋭②卷十八③P二
五五—2 V・「自然の
姿」・〈日月風雨〉④「母
恋」(53)

時長く虹は立ちたり戦没者追悼式のすす
むうみべに

(101) ①川辺古一②卷十八③P
五〇—5 I・「戦争の
傷跡」・〈戦跡を訪ねて〉

清く冷たき水に棲むゆゑ虹鱗は水より揚
げて命落ちやすし

(106) ①黒沢裕②卷十八③P二
六七—3 V・「自然の
姿」・〈魚〉④『泰山木の

花 (50)

海峡の狭霧に淡き昼の虹われはかなしむ
還らぬ島を

(107)

①佐々木忠郎②卷十九③
P一〇四一三 II・「戦
争の傷痕」・(北方領土)

④「アララギ」(49・5)

嫁がずに細々と病む妹と電車の窓に見る
冬の虹

(108)

①森崎正明②卷十九③P
二一三一 IV・「愛と
死」・(兄弟・姉妹)④「心
の花」(49・11)

夕立のおそう背後をふりむけはらずこの
危機か虹たちにけり

(109)

①新城貞夫②卷十九③P
二九一七 VI・「くさ
ぐさの歌」・(若き情念)
④「花明り」(54)

セレン河に虹たてば帰国の前兆と喜び合
へりかの俘虜の日よ

(110)

①引田正男②卷二十③P
四八一 I・「戦後三
十年」・(俘虜として)④
『遠天』(50・10)(51・
1)

朝刊をたたみて卓の端に置く虹たつこと
もなくて昏れたり

(111)

①潟岡路人②卷二十③P
七〇一四 II・「生活の

機械植ゑの早苗が水をふくみゆきホース
の先に虹がたちくる

(112)

①本望愛子②卷二十③P
一〇五一六 III・「農に
生きる」・(米作り)④「毎
日新聞」(50・8・24)

ほのぼのと虹立ち初めし朝の間を時雨過
ぎつつ刈田を濡らす

(113)

①佐藤広治②卷二十③P
一二三一四 III・「農に
生きる」・(農村風景)④
「朝日新聞」(50・11・
9)

ひと山をつつみて夏の虹立てり死なせて
ならぬ人逝きし日に

(114)

①代居三郎②卷二十③P
一八九一五 IV・「愛と
死」・(挽歌)④「ひのく
に」(50・9)

晴れやかな空の夢精を思ひけり谷のうへ
なるきれぎれの虹

(115)

①柏木茂②卷二十③P二
六三一八 VI・「現代の
歌」・(青春)④「功子」
(54)

少年らは汽車を観るのみ春の虹のはかな

①加藤将之②卷二十③P

くも立つローマ駅にて

(116) 二九三—7 VI・「くさ

ぐさの歌」・〈海外の旅〉

④「短歌」(50・2)

小 考

『昭和萬葉集』は、その名の示す通り、昭和元年より昭和五十年に至る五十年間の作品を収録しており、よって昭和の御代の短歌を大凡、大観できる資料である。とは言え、ここに少しく解題的注の付記を必要とする。すなわち、近代以前の勅撰集や、近代の大撰集(明治・大正の代と昭和十二年までを含む)『新萬葉集』^(注1)との編集上の相違の大きな点は、これらが「作品本位」であるのに対し、『昭和萬葉集』の方は「年代本位」、すなわち編年体方式にあるということである。かく編年体方式に主眼がおかれたがゆえに、短歌プロパーの価値基準によるアンソロジーというより、歴史的現実による素材に重きが置かれることになり、いわば理性的な「昭和史」^(注2)に対して、山田宗睦^(注3)氏の表現を借りれば「昭和の感情史」的性格を濃厚にしているのである。それもまた鶴見和子^(注3)氏の響に倣えば、「常民の心の奥底にある心情をもうたいあげたもの」なのである。ともあれ、当面のテーマたる〈虹〉に関する研究に際しては、文学における芸術的価値を第一義に置いて編まれたものでなくとも、視野を拡大して文化史的資料として受け入れておくことにすれば、本稿の意図に離反すること大ではなからう。

さて、まずは数量的分析より入りたい。稿者の調査によると、『昭和萬葉集』四四二四八首中、〈虹〉の語を有する歌は一一六首であり、その内分けは次のごとくである。

(巻)	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一
虹数	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十
(収録歌数)	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十
(年代)	昭元	昭5	昭6	昭8	昭9	昭11	昭12	昭14	昭15	昭16	昭20	昭22	昭23	昭24	昭25	昭26	昭27	昭29	昭30	昭31
	5	8	11	14	16	20	22	24	26	29	31	34	38	42	44	46	47	48	49	50
すなわち、2—11の数値的範囲はあるが、各巻すべてにわたって																				

《虹》は出現しているのである。トータル的に見て、『新萬葉集』と比較するならば、『新萬葉集』は、五六／三〇四二三・〇・〇〇一八％、『昭和萬葉集』は、一二六／四四二四八・〇・〇〇二六％であり、これを見る限り『昭和萬葉集』の方が、数量的にやや優位を保っている。しかし、先に述べた両者の編集上の特色を顧慮すれば、さほどの相違はなからうとも言えようか。ただし、『古典和歌』の世界と比べれば格段に多い。

また、外来語表記の「レインボー」とか、記紀を淵源として『新萬葉集』にも見えた、《虹》の陰喩とも考えられる《天の浮き橋》は見られない。巻十二に「伎芸天女」の歌（P282）がみられるが、この「天女」の部分は、《虹》の雌的要素が浄土系仏教等を経由して、文化的に昇華したものである。従ってその属性は奥に追いやられている。

歌人の性別をみると、「女性」は、《虹》歌において、古典和歌の世界では皆無であったが、近代の『新萬葉集』11名に続いて、『昭和萬葉集』では23名と増加。（ただし、男性の数には遠く及ばない。）《虹》の古代的受容、すなわち『詩経』（cf. ①・（注9））等に見られた女性における《虹》の「禁忌」的呪縛からの更なる解放を示す。

続いて、表現・内容の面をえつつ、微視的な分析に入る。

② 『新萬葉集』と資料時代的に重複するのは、『昭和萬葉集』では、巻一―巻四であり、その中、⑫・⑬の二首が重複している。

これは、『昭和萬葉集』は「部立てが二重構造になっている、各巻の初めのほうに、その年代に起きた歴史的な出来事別に歌を配列して、その次に、男女の愛情（相聞）や死（挽歌）、生活や仕事の

歌（雑歌）、それから自然詠と、歌集として当然とるべき部立てをおいている。^{（注2）}」のであるが、特に《虹》は、そのテーマのもつ属性からして、愛・死・挽歌とも親近してはいるが、いきおい後者、自然詠に多出し、この面では、『昭和萬葉集』の編集的特質とややずれて、本来的な「作品本位」の面からかなり採られていることを象徴的に証左しているものとも言える。

③ 『昭和萬葉集』の《虹》は、おおむね『新萬葉集』の《虹》の延長線上にある。すなわち、手堅いアララギ的写生技法によって構築された写生歌群である。素材の属性たる仄かなローマン性をまつわらせつつも、それらは、素直な目がとらえた（ただし、色数に関しては⑬・⑭歌のごとく「七」色と、ニュートン以後の科学文明の知識による先入観に染まった面も見られるが、（※現実には「七」などとはつきりと目に色別するのは困難）、日本の自然神的美観に支えられている。しかし、

④ 夕淡く懸れる虹の輪のなかに水そことなる村はひそけし

⑤ コスモスの揺れる彼方に虹は消えまた平凡なたそがれの町

などは、抒情味の方が勝っているので、抒情的写生歌と言っておいた方がよいかも知れない。また、詠歌の地理的分布がグローバルで従って、《虹》歌の背景が国際性に富み、おのずからエキゾチシズムの魅力を湛えている面の存すること（ex 40・90・116）は、先行『新萬葉集』の延長・敷衍上にある。

⑥ しかし、近代↓現代へ、この時代的変遷に従って、その場面あるいは背景は、かなり変わってきている、例えば、

⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

りし町の冬〈虹〉」

(46) にみる「ダムに沈む村」にたつ〈虹〉

(93) にみる「スモッグの空」にたつ〈虹〉 類歌 22

(94) にみる経済構造の劇変などによってもたらされる減反措置等による「きびしい農村」にたつ〈虹〉…等。

であり、このあたりが、〈虹〉を配しつつ叙景されながらも、その特色たる「昭和の感情史」の面目を果敢に發揮している面であろう。

〔四〕 また、写生の対象たる〈虹〉が、自然の実景としてのそれには違いないが、しかし、おのずからたつ大自然の現象としての〈虹〉ではなく、人または物・機械の作為の結果によって生まれる〈虹〉が、『昭和萬葉集』には現れている。例えば、(30)・(32)・(85)・(100)・(111)等がそれである。

〔五〕 また、〈虹〉の特殊な出現形態たる、(A) 株(蕪) 虹 (21) (68) の他に、(B) 副虹(または第2次虹) (27)、(C) 日の暈または副虹の反射虹 (41)、(D) 月虹 (34) も現れている。(1) は飛翔詠による〈眼下の虹〉、(41) はアリゾナの砂漠の空に現れた「幻日」を含むものである。 (A)・(B) は末部付載の〈虹〉の解説(参照)

〔因〕 次に、〈虹〉「出現」の表現・表記をみると、

a1 〓 顕つ 〓 2 首 a2 〓 たつ (わき) 〓 23 首 a3 〓 立つ 〓 19 首

b1 〓 懸る 〓 1 首 b2 〓 かかる

c 〓 あらはる 〓 2 首

d1 〓 生る 〓 2 首 d2 〓 ある 〓 1 首

e 〓 あがる 〓 1 首

である。a 系 〓 TA Tu 系が圧倒的に多い。a2 〓 たつ、は表音文字な

ので測りかねるが、本来、和語では〈虹〉は「たちもの」ともいい、a1 〓 顕つ、すなわち「この世ならぬもの、神威あるもの、の顕現」を意味し、a3 〓 立つ、はその認識を奥に蔵しつつも写生的に表記したものであろう。b 系 〓 KA Ru は、稿者のいう二次認識による「架橋」型認識からきたものであり、c・d・e は現代的表現である。古典東国和語に見られる「吹く」・「張る」は見られない。

因みに、存在・状態の表現は、

「見ゆ」・「こゆ」・「落つ」・「移る」・「描く」

であり、消滅の表現は、

「消ゆ」

の一語のみであり、古典和歌以来の伝統的なものである。

〔因〕 次に、かなりの特記事項たるべきものであるが、『新萬葉集』には稀薄であった、古代的な民俗意識に支えられたものが出現している。すなわち、〈虹〉の古代的呪縛・禁忌から完全には解禁されていない面が露呈されている。例えば、

(100) 夕立のおそう背後をふりむけははずこの危機か虹たちにけり

(59) 議事堂を目標せる示威の過ぐる今日しぐれの暗き夕虹の下

(98) 雄ごころやわれに流れて虹たつをむかし群盗のほろびたる石

(114) ひと山をつつみて夏の虹立てり死なせてならぬ人逝きし日に

(101) 時長く虹は立ちたり戦没者追悼式のすすむうみべに

(17) ひとよさを君が亡骸をまもりたるあかつきにして低き虹たつ

(102) 虹ヶ浜に夜ごと爆死体を焼きし炎眼底にありて二十八年経つ等には、古代的凶・凶・妖・妖の暗示がみえる。(100)・(59)・(98)には

「白虹貫日」的なもの、(114)・(101)・(17)には「天上界」と「地上界」、

「あの世」と「この世」を繋ぐ靈魂の通路、すなわち〈架橋〉型の

古代的意識がひそんでいよう。(42)の「虹ヶ浜」という地名の言霊に
もそれに類する思い入れがあるう。

(86) ベッドよりわれをよぶ君虹を溶くごとく油彩にあそべる夜を

(115) 晴れやかな空の夢精を思ひけり谷のうへなるきれぎれの虹

には、エロチシズムあるいは淫事(注9)に通ずる夢想がみられる。その意
味で、これは、遠く『萬葉集』東歌の、

三四三三 伊香保呂能 夜左可能為提尔 多都努自能 安良波路万

代母 佐祢乎佐祢弓婆

(新編 国歌大観)

に直結する質のものであるう。これら、凶祥、妖祥・淫事(広く恋愛
も含めて)と絡めて見る受け取り方は、『萬葉集』東歌の一首や
西行(注10)のような歌僧、衣笠内大臣等を数少ない例外として、上代・中
古・中世・近世、の和歌史が忌避しつづけてきたもののようである。
逆に「虹」をこの上ない吉祥・瑞祥と観ずる向きもある。これも
また古代的意識に根ざしたものである。

110 セレン河に虹たてば帰国の前兆と喜び合へりかの俘虜の日よ

96 噴水のしぶき交はるたまゆらを 幸のごと秋の虹たつ

等がそれである。(8)・(14)・(23)・(44)・(92)等もその類型であろう。また、

60 噴水の水に時のまの虹立てば如何ならむ明日わがために待つ

は、「不幸のあとにくる希望の象徴」として「虹」を観る旧約聖書(キ
リスト教)的世界観に染まったものである。作者が家庭内不和に苦
悩し、キリスト教系大学(東京女子大)の出身者である—という事
実を知れば符号しよう。(36)・(37)・(39)・(40)・(48)等もこの系譜に連な
ろう。前者は、単に「虹」の「吐金」また「虹脚埋宝」民俗信仰に
淵源する「瑞祥・至福」観であり、後者は、その延長線上に宗教文
化的色合いが附加されたものである。

四 「昭和萬葉集」中、「虹」語を有する歌一一六首のうち、その「虹」
が、いわゆる自然詠のそれ以外のものが、一九首程ある。

A 比喩的用法 (35) (44) (69) (71) (86) (92)

B 形容語 (58) (66) (82) (99) (102) (104) (106)

C 心象 (15) (47) (70) (73) (76) (91) (98) (78)

このうち広義に解すれば、BはAに吸収されうるものかも知れな
い。C中の、(78)は作者から類推したもので、(111)は定家の三夕の歌な
どに見られるミセケチ的(注13)心象詠である。

いずれにせよ、『昭和萬葉集』の新生面を如実に示すものはCの
歌群である。これらは、(91)歌に見るべく戦後の三十年代に澎湃とし
て沸き起った前衛短歌運動とその潮流の影響を何らかの形で受けて
成立しているものであろう。ただ、(13)・(14)の前川佐美雄歌、(15)の斎
藤史歌の表現は、昭和十年代「新風十人」の一人として華々しくデ
ビューした歌人らしく、他の歌群を二十年ほど先取りしていると見
ることができる。(47)の大田満喜子の歌は、前衛短歌時代前後のもの
と解せよう。

かくて、『昭和萬葉集』に現れた「虹」は、ほのかなローマン性
をまつわらせつつも、おおむね手堅い写生技法によった、素直な目
がとらえた日本の自然神的美観の結晶であるが、中には特異なもの
もみられる。そのうち現れ方が、和歌撰集史上の特色と思われるも
のを大別してみると、

(1) 叙景的素材の歴史性・社会性を含んだ新しさに触発された
清新な抒情世界に、

(2) 複雑玄妙な光科学現象たる、(3) 副虹(または第2次虹) (C)
日の暈(ハロー現象) または副虹の反射虹、(D) 月虹、とし

て、

- 〔3〕 心理の深層に眠る古代的民俗意識―不吉・凶祥・妖祥等また逆に吉祥・瑞祥―の間歇的覚醒と発現と共に、
- 〔4〕 旧約聖書（キリスト教）的世界観の対象として、
- 〔5〕 前衛短歌的・知的、心象詠の出現と絡って―現れる。
- 等に要約されよう。そして、これらは一般の歴史学から漏れ落ちている、常民による「昭和の感情史」的意義面の一角を確かな形で担っているのである。

- 〔注1〕 拙著『新萬葉集の成立に関する研究』（昭46・中部日本教育文化会）の第三章「審査委員会と其の内容」、第十二章「審査過程上の諸問題に就きて」中に詳述。
- 〔注2〕 「対談 昭和短歌の源流―『昭和萬葉集』について―」（『短歌』（昭56・3、角川書店））中、山田宗睦氏の言を参考。
- 〔注3〕 「昭和萬葉集」発刊に寄す」（『昭和萬葉集』パンフレット）久保田淳筆「虹の歌」（『文学』1991・夏、岩波書店）の引用歌十小生の調査、によると「五十八」首、cf.拙稿「虹と日本文藝―古典和歌・付狂歌をめぐって―」。但し、分母が膨大。
- 〔注5〕 末尾の解説・図絵参照。
- 〔注6〕 先行の撰集『新萬葉』に登載されなかったが、その成立以前の個人歌集の中には、すでに現れている。例えば、あらはれし二つの虹のはへるにひとつはおほろひとつ清けく
斎藤茂吉「つゆじも」（大9）
北山の濃藍の前の二重虹時雨は遠く過ぎにけらしな
尾上柴舟「朝ぐもり」（大7）
- 〔注7〕 ①（1）型は『新萬葉集』に既出。
「〔史記鄒陽伝〕 白い虹が太陽をつらぬくことで、中国で昔の兵乱のある天象とする。」（『広辞苑』）「白色の虹が日の

- 面を突きとほす。精誠が天に感應してあらはれる象といふ。又、白虹は兵の象、日は君で、君に危害を加へる象といふ。
- 〔戦國、魏策〕 夫專諸之刺王僚一也、彗星襲月、竊政之刺一韓傀一也、白虹貫日。〔史記、鄒陽傳〕 昔者荆軻慕燕丹義、白虹貫日、太子畏之。
- 〔注〕 集解曰、應劭曰、燕太子丹、質於秦、始皇遇之之無禮、丹亡去、故厚養荆軻、令西刺秦王、精誠感天、白虹為之貫日也、如淳曰、白虹兵象、日為君（云々）（諸橋轍次著『大漢和辭典』卷八、昭33、大修館書店）この思想は日本に入って、『日本書紀』一「天武天皇十一年」―「是の夕の昏時に、大星、東より西に度る。……是の日の平旦に、虹ありて、天の中央に當りて、日に向へり。」（岩波『日本古典文学大系本』による）にも、その暗示があり、民間にも傳承されていたと見えて、『源氏物語』の「賢木の巻」、『平家物語』の「威陽宮」、『平家物語』の「信西出家の由来」並びに「南部落ちの事」等の中にも現れている。
- 〔注8〕 拙稿「虹と日本文藝」(A)―比較研究資料通考―にいう、(虹)の③二次的認識(ロ)①型にあたり、古代グローバルに見られたものである。なお、同「比較研究資料私註(7)」③の「考」に詳述。
- 〔注9〕 古代中国の類書『藝文類聚』には「釋名曰虹陽氣之動虹攻也純陽攻陰氣也 又曰夫人陰陽不合婚姻錯亂淫風流行男女互相奔隨之時此則氣盛故以其盛時合之也」とあり、『詩經』の「鄒風」中「蠓蟪」と題して「蠓蟪在東 莫之敢指 女子有行 遠父母兄弟 朝隲于西 崇朝其雨 女子有行 遠兄弟父母 乃加之人也 懷婚姻也 大無信也 不知命也」とあり、また「國風」中「候人」と題して「維鵲在梁 不濡其味 彼其之子 不遂其媾 舊兮蔚兮 南山朝隲 婉兮變兮 委女斯飢」があり、むくむくとたち升る（淫氣）に（隲）を見、そこに性的欲求不満からくる邪淫願望の反映を見ている。その淵

源に「(ニジ)＝(蛭・蝮・虹・蛇)」を、その象形文字の示すごとく「蛇類の動物」と観ずる民俗からきている。(甲骨文字にも見。cf. 拙稿「比較研究資料私註(一)」の「考」中。「邪淫」は「蛇淫」に通じ、その属性としての濃厚なセックスの観察からきたものであろう。これも古代中国のみならずグローバルに散在していたものである。(cf. 拙稿「比較研究資料私註 参照」)当然わが国にも「虹」を「竜蛇」・「天蛇」あるいは「大へび」と見る民俗がある。(安間清著『虹の話―比較民俗学的研究』昭53・オリジン書房)

さらに又そり橋わたす心ちしてをぶさかかれるかづらきの山

(注11) かりそめにみしばかりなるはしたかのをぶさのはしの恋ひや
わたらん
『夫木和歌抄』

(注12) 【旧約聖書】(キリスト教・ユダヤ教(の一部))中「創生紀」第九章・前半。「神ノア和其子等を祝して之に曰たまひけるは生よ増殖よ地に満よ：我わが虹を雲の中に起さん是我と世との間の契約の徴なるべし…水再び 諸の肉なる者を滅ぼす洪水とならじ…永遠の契約を記念えん…」(日本聖書教会編【旧新約聖書】—1976—による。) 〓 cf. [29]

〔注13〕『新古今和歌集』363番

cf. み渡せば花ももみちもなかりけり浦の苫屋の秋の夕ぐれ
「暮れ行けば浅間も見えず／歌哀し佐久の草笛」(鳥崎

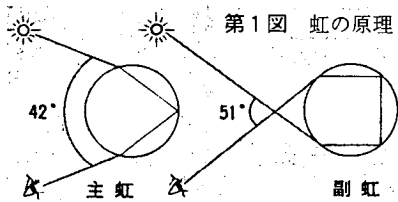
藤村『落梅集』 山崎敏夫『新古今私説』参考。

(注14)
注2

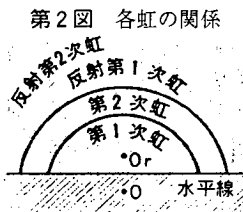
(注15) 注3参照。

吉田義孝筆「記紀万葉に歴史を読む③―大津皇子の謀反」

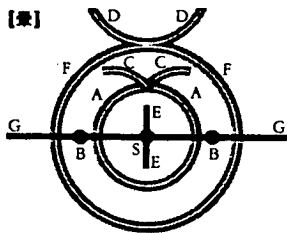
〔朝日新聞〕昭61・12・13にも「これは史官のほかした表現で、『訁(こう)』(乱の意)と同義の『虹』を用いて、当時、律令制定にからみ『造法令殿でだいなる内訁』のあったことを暗喩したものとしてよい」とある。cf. 72s。



第1図 虹の原理



第2図 各虹の関係



第 3 図

〔主虹—副虹（第1図）〕

〔反射虹（第2図）〕〔暈・幻日・環・弧（第3図）〕

株（蕪虹）「頭が雲におおわれて見えず、足の部分のみが1本あるいは2本、時には3本地面にほとんど垂直に立って、あたかも天を支える五色柱のような感じを与えるものである。：普通の虹は雲の前面に見える。株虹は雲の向う側に見える訳であるから極くまれにしか起らない。」（『気象の事典』昭和40、東京堂出版、北岡氏筆）

cf. 川端康成「美の存在と発見」中、「沖のひとところに真直ぐに立つ虹、月の暈のやうに月を巻く円い虹、その美しさの話を、わたくしはハワイで俳句をつくる日本人から聞きました。」（ハワイ大学ヒロ分校での公開講義、『毎日新聞』昭和44・5・3、夕刊）

昭40、東京堂出版、北岡氏筆）

『気象の事典』(昭40、東京堂出版)より